

詠懷浮憂篇

島田修三

それは金木犀のおいをかぐたびに思い出す僕の少年時代そのものなのだ（阿部昭）
不二家フランス・キャラメルの甘さはも忘れ果てたれ厄年も越ゆ

親というものは、忘れかけたころ暗い謎となつてよみがえつて来る

むかし母と渋谷恋文横丁を往きてはぐれて泣きし日暮れかな

あざやかなデジャ・ヴュに重なりながら

俺の背をやや越えてゐる気配にて息子といへる鬱陶しき楡

猫の命名は、どうしてなかなか大仕事なんだ（T・S・エリオット）

猫またのごときが甘ゆる声に呼ぶ紫陽花の辺にわが行かむとす

わがころのよくて殺さぬにはあらず（親鸞）

感情の襲に食ひ込む殺気一つ和ませワントンの冷めしを啜る

われら母国を愛***し味爽あまより生きいきと蠅あひしめける蠅捕りボン（塚本邦雄）

蛆虫のちまむちまむと這ふさまもこのごろ見ずてわれ恋ひにけり

草の上にすわっても、気のつかぬ誤解がある

深雪をぞフカユキと訓みあはれあはれ芸名にしたる粗忽者あり

牝性ののっぺりと瀾漫する白っぽい日本の家々

似マンション非邸宅の谷間にくぐもる胸間声ニツポンの男の声ぞこの声

人間は、現実をなくした分だけ確実に女性的になり、心理的になる（橋本治）

つひに俺はわが料簡を量りかね今から麦酒に酔ふ料簡である

私はその日人生に、椅子を失くした（中原中也）

静けくも昏れゆく街路に降りイちて凄^{さび}しき寡^{やもめ}婦のごとし嘴^{はしぶと}太鴉

日常とシンクロナイズする愉楽は何ものにも代えがたい

チンパンジーの苗なるをわが童^{うなみ}女育ててゐたり堇は咲きたる

ピリー・ワイルダーの映画ばかり観ていたころ

青^{あをこち}東風にフレア・スカートめくれ上がり脂肪ぶあつき臀ひとつ見ゆ

淋しいスカトロジーを旧友と陽気に語り合つて、淋しく別れた

犬といふ俗なるケモノは身を絞り月下の舗道に糞をぞひり出す

歴史はついに進歩なんぞしない、性懲りもなく愚行を繰り返すばかりだ

近世も凍てゆく享保に従^{じゆしめ}四位なるインド象ありき飢餓に果てたる

必要があつて、サンタワラの歌人の終戦前後を徹底的に調べた

鼻にかかる山形弁に苦しみしを記して茂吉は老いにぞ入りたる

むかし、重い切ない夢ばかり見ていた一時期があつて

書庫出でて徹くさき手を洗ひつつああ俺といふ出口なき迷路

いよいよ淋しい時代になつて行く

花十薬とくだみの花しろじろと咲き初めて夏ならむとす豆腐屋の跡地

成分は変わらないんじゃないか

尿ゆまりもて素肌を磨く娘たちイヌイツト族たつきの生活ぞ深かる

産女うぶめは実に何というか、哀しげな妖怪なのだよ

産む性の産みながらざるニツポンの爛るる春夜を産女らは来よ

そばに来るな、たたるぞ

おお昨日きせのその場しのぎの優しさが深夜電話に化けてまた響なる

「フカシ入れてんじゃねーよ」を正しく使う

商品名へもつてのほかなる食用菊見てゐてバカにされたる気分

なごら健老の「悲惨な戦い」には笑いころげたなあ

へ思い出がが何さなどとふ替え歌を唄ひてをれば諭さる息子に

ねこまになりて人とることあなるものを（徒然草）

ひひらぎの根もとに臥してうかがふは発情すぎき二匹猫また

いまだに笑えるスターリン・ジョークの数々を残して

ソ連とふ苦しみし大国消えたるは昨年こぞや今年やもはら覚えず

野尻抱影は天文学者だとばかり思っていた

「海辺の女學寮」なる小説ノヴェルにてむかしの明眸皓齒らけだかし

「春」の語源について考えていた

目白押しに目白ら止まるひひらぎの秀はつ枝辺りはさんざめく春

夕刻五城玄関まで来る 土産林檎六個と煙草の灰吹なり（仰臥漫録）

ピアマグと呼ぶに奇怪なゴテゴテの付きたる土産をくれしが困る

童女の手をひいて父はセブンスター・マイルドを買いに出た

くりくりと月の満ちたるふみづきの夜空か近ごろ乱視おさまる

「捨てない」という反時代的意志をこそ持て

購ひ置きし『どぜう養殖講義録』ほとほと檻ぼろ裡にて捲りあへざり

時人、衰偶を賣むるといえども、様式を喰い破るモチーフを信じよう

物のやうに重たき歌に詮もなく魅かれゆくかな寒また戻る